

セルフ・モニタリングの心理的メカニズムとその個人差が 就労に及ぼす影響

立教大学 大嶋 玲未

Psychological mechanism of self-monitoring and the effects of its individual differences on work
Remi Ohshima (Rikkyo University)

本研究で注目するのは、社会的な適切さについての状況の手掛かりをガイドラインとして、自身の表現行動を観察し、統制する傾向性 (Snyder, 1974) と説明される、セルフ・モニタリング (self-monitoring) というパーソナリティ特性である。セルフ・モニタリングは、状況の手掛かりへの敏感さにかかわる「感受性」と、状況に応じた表出行動の統制にかかわる「変容性」の2要因から説明され (Lennox & Wolfe, 1984)、これらの得点の高い個人は社会的状況下において、状況的に適切な行動や、相手に望まれる行動を進んで選択する傾向性が強いとされる。こうした傾向性は就労者にとっては望ましい特徴の一つとされ、産業・組織心理学の分野では就労者のセルフ・モニタリングの効果にかかわる多くの研究が行われてきた (e.g., Day, Schleicher, Unckless, & Hiller, 2002)。

しかし先行研究においては、セルフ・モニタリングがどのような心理的メカニズムによってもたらされる個人差であり、どのような原因で就労にかかわる結果に影響を及ぼしているのかについての検討は十分でなかった。そこで本研究ではセルフ・モニタリングの個人差を個人内での一連の心理的メカニズムとして捉えたモデルを示し、全7章の研究を通じて、セルフ・モニタリングの心理的メカニズムと就労に及ぼす影響を解明することを目的とした。また、就労者がセルフ・モニタリングを高めることの意義、および後天的な育成可能性を論じることを通じて、本研究で得られる知

見を実務に役立つ形で提示することを目指した。

*

1章では、セルフ・モニタリングの概念について整理し、産業・組織心理学の領域を中心にセルフ・モニタリングにかかわる先行研究を概観した。また先行研究から残された課題を明らかにし、セルフ・モニタリングの個人差を説明する心理的メカニズムを体系化したモデルを示した。

2章では、本研究で使用する Lennox & Wolfe (1984) のセルフ・モニタリング尺度を構成する2つの下位尺度「感受性」と「変容性」の機能の差違と、2つの下位尺度が結果に及ぼす影響過程を明らかにすることを目的とした。具体的には、(a) セルフ・モニタリングが就労にかかわる結果指標に与える影響において、感受性は主に認知レベルの指標に作用し、変容性は主に行動レベルの指標に強く作用する可能性、(b) セルフ・モニタリングが結果指標に影響する過程においては、感受性が変容性を介して結果指標に影響を与えるという媒介のパスが存在する可能性について検証した。結果から、上記の2つの予測は支持された。2章の結果からは、セルフ・モニタリングの2つの下位尺度が結果に及ぼす影響の差異が明らかとなり、セルフ・モニタリングの効果を検討する際には、下位尺度を分けて扱う必要があることが示唆された。また、これまで並列的に捉えられてきた2つの下位尺度は、感受性から変容性へと移行

する順序的なプロセスである可能性が示された。

3章では、セルフ・モニタリングの個人差によって行動の手掛かりにする情報に差違がみられる可能性に注目し、その影響によって生じると考えられるセルフ・モニタリングの調整機能のメカニズムを検証した。3章の結果からは、高モニターは自身の性格特性が結果指標に及ぼす望ましい影響ばかりでなく、悪い影響も抑制することが示された。これは、高モニターが自身の性格特性よりも、環境や周囲の状況などの外的情報を行動や判断の基準として参照する傾向が強い可能性を示すものである。そのため、セルフ・モニタリングの個人差をもたらし心理的プロセスの起点には、社会的状況下での意識の方向性の差異が存在する可能性が示された。また2章で確認された傾向と同様、セルフ・モニタリングを調整変数として捉えた場合においても、調整する指標が認知レベルの指標か、行動レベルの指標かによって、セルフ・モニタリングの2つの下位尺度の影響は異なることが示された。

4章では、美容師を対象とした観察調査を通じて、セルフ・モニタリングの個人差によって就労者のサービス提供行動にどのような差異がみられるかを検討した。またセルフ・モニタリングの先行研究が量的調査を中心に展開されてきた点に注目し、本研究で示したセルフ・モニタリングの心理的メカニズムにかかわるモデルに質的な解釈を加えることを目指した。結果から、低モニターは周囲の状況に敏感でないために高モニターは周囲の状況よりも内面的な特徴が業務中の行動に反映しやすく、業績を予測する性格特性（たとえば、外向性）の得点が高い場合には高業績をあげやすいことが示唆された。これは3章で注目したセルフ・モニタリングの調整機能から説明可能な事象である。さらに、これまでサービス就労に適していると考えられてきた高モニターには（a）社会的状況下で特定の目的が遂行しづらくなる、（b）役割葛藤に陥るリスクが高くなるという弊害がある可能性が示された。

5章では、就労者の職務上の「条件」に注目を

し、セルフ・モニタリングはどのような条件の就労者において重要かを検討した。様々な業種、職種条件の就労者を調査対象とした5章1節では、サービス就労や営業職といった他者とのかわりが必要とされる職務に従事する就労者には、自身の職務を遂行する上でセルフ・モニタリングが必要だと捉えられている傾向があることを始め、セルフ・モニタリングが就労者に必要とされる条件が明らかになった。また5章2節ではセルフ・モニタリングが必要とされる仕事の一つであるサービス就労の中でも、主に、顧客との接触が一過的で短期間のサービスで、セルフ・モニタリングの高さが顧客からの評価の高さに結びつくことが示された。

6章では、セルフ・モニタリングは教育やトレーニングによって高めることが可能か、さらに高めようとする際にはどのような取り組みが有効かを検討した。はじめにセルフ・モニタリングを、気質としての要素、動機としての要素、スキルとしての要素に整理し、育成を考える際には、セルフ・モニタリングを説明するスキルとしての要素をいかに高めるかが課題になる可能性を示した。さらにセルフ・モニタリングのスキルとしての要素、つまり、直接的に尺度によって測定される2つの下位尺度の得点は、教育やトレーニングにより関連する社会的スキルを育成することで高めることが可能であるとの立場に立ち、セルフ・モニタリングと関連の強い社会的スキルを検討した。結果から、感受性で説明されるスキルを高めたい場合には、読解力、チームで働く力、変容性で説明されるスキルを高めたい場合には、自己統制、表現力、関係調整、前に踏み出す力、チームで働く力といった社会的スキルの育成が有効である可能性を示した。さらに仕事にかかわるキャリアへの関心が高まることで、セルフ・モニタリングが向上する可能性があることを明らかにした。

7章では、1—6章で得られた知見に基づき、セルフ・モニタリングの個人差を説明する心理的メカニズムと、その個人差が就労に及ぼす影響を明らかにし、本研究の実践的含意について述べ

た。また、今後のセルフ・モニタリング研究で取り組むべき課題について明らかにした。

引用文献

- Day, D. V., Schleicher, D. J., Unckless, A. L., & Hiller, N. J. (2002). Self-monitoring personality at work: A meta-analytic investigation of construct validity. *Journal of Applied Psychology*, 87, 390–401.
- Lennox, R. D., & Wolfe, R. N. (1984). Revision of the self-monitoring scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1349–1364.
- Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526–537.

SJDM 2015参加報告

立教大学大学院現代心理学研究科 千葉 元気

SJDM 2015 (Society for Judgment and Decision Making The 2015 36th Annual Conference) は、2015 年 11 月 20 日から 23 日までアメリカ・シカゴのホテル、シカゴヒルトンで開催された。SJDM は判断と意思決定に関わる研究に特化した学際的な大会である。そのため心理学だけでなく、経営学や経済学、工学分野の研究発表も行われる。開催の日程は例年通り、初日は Reception と Registration、2 日目は主に Paper Session、3 日目は午前と午後に Poster Session があり、その合間に Paper Session が行われ、最終日は昼頃まで Paper Session が行われた。今年度は、初日に Reception と Registration だけでなく、Paul Slovic のこれまでの活動を讃える講演が開催された。この講演では、Daniel Kahneman や John Payne など、意思決定研

究の分野において非常に有名な研究者がスピーカーとして参加した。筆者はポスター発表のため参加し、22 日の午前中の Poster Session にて発表を行う予定となっていた。

Poster Session はシカゴヒルトン地下のサロンで行われた。今回の学会では、知覚的意思決定課題における文脈効果 (Context effects) と、その情報探索過程について発表を行った。文脈効果とは、選択状況における選択肢の利用可能性などにより、特定の選択肢への選好が増加する現象である。これまでは、文脈効果は主に消費者行動の研究分野で検討されてきたが、近年の研究は、図形の大きさの判断を求める低次元知覚的意思決定課題においても、同様の文脈効果が生じることを示した。しかし、消費者行動研究において確認され



写真 1 ポスター発表会場と発表前の Continental Breakfast

てきた文脈効果と、知覚的意思決定課題において確認された文脈効果が同様の認知過程を通じ発生するかは検討されていなかった。そこで本研究では、知覚的意思決定課題における文脈効果の認知過程を検討するため、課題中の眼球運動を測定することで共通する要因を情報探索の観点から検討した。結果として、知覚的意思決定課題は課題自体の認知的負荷が低い可能性があり、そのため直観的な認知処理により発生する文脈効果は知覚的意思決定課題において再現され、消費者行動研究で示された情報探索と同様の眼球運動を確認することができた。一方で、熟考的な認知処理により発生する文脈効果は部分的にのみ再現された。発表には多くの参加者が来ていただいたが、中でも前述した John Payne と Eric Johnson に訪れていたことに非常に驚いた。二人とも初期の文脈効果、意思決定研究において多くの功績を残し、今なお意欲的に研究を行っている大御所である。二人に対し、握手だけでなく自身の研究の発表・ディスカッションを行うことができたことはとても素晴らしい体験であった。

多くの発表の中で、筆者の研究と分野が近く、発展的な研究がいくつか見受けられた。Jennifer Trueblood と Jonathan Pettibone は、知覚的意思決定課題を用い、消費者行動研究で示されてきた文脈効果の1つである幻効果（Phantom effect）に

ついて検討した研究について発表を行った。この発表では、消費者行動研究で確認された幻効果とは真逆の選択が知覚的意思決定課題においてなされたことを報告した。彼女らの研究では考案したモデル（the multi-attribute linear ballistic accumulator model）をもとに選好形成過程について論じており、実際の認知過程や情報探索について検討を行っていない。従って今後の研究では、選好形成過程の眼球運動や注意の観点から検討する必要性があると考えた。

SJDM は Psychonomic Society's 56th Annual Meeting（開催期間：2015年12月19日―22日）と同時期に開催し、2つの学会期間中にカリフォルニア大学の Alan Kawamoto 教授と夕食をご一緒にする機会があった。Alan Kawamoto 教授は発話産出に対する研究を行っており、筆者は昨年から日本語話者への発話実験を依頼され、取り組んでいる。夕食は、Alan Kawamoto 教授とご息女、大学院生の Peter Krause、筆者と立教大学現代心理学部教授の都築誉史先生、立教大学現代心理学研究科の大川達也君の6名で摂った。夕食中の話題は、各々が現在取り組んでいる研究や筆者の卒業後の進路、シカゴの観光スポットなど多岐に及んだ。Alan Kawamoto 教授は終始ジョークを交え、筆者たちにも聞き取りやすい英語で話しかけてくれた。筆者の専門分野は意思決定であるが、異な



写真2 名物のシカゴピザ

る分野の研究について、その専門家と膝を向き合わせ詳細に聞ける機会は非常に貴重であった。

今回の学会では、発表した研究について多くの研究者から意見をもらうことができ、有意義なディスカッションができた。また、最新の研究発表の場で近い研究分野の報告がなされていたことから、当該分野の鮮度を感じることができ安心も

した。加え、異なる研究分野の専門家と話す機会があったことも貴重な経験で、大規模な学会ならではの醍醐味である。来年の SJDM と Psychonomic Society はボストンで開催される予定である。次回大会でも発表を行う機会を持ちたいと強く思う。

APTA 2015 参加報告

立教大学大学院現代心理学研究科 川久保 惇

概 要

私は、2015年5月14日（木）から17日（日）まで、マレーシア（クアラルンプール）で開催された第21回アジア太平洋観光学会 Asia Pacific Tourism Association（以下 APTA）に参加した。APTA はアジア太平洋地域内の観光研究の発展を目的とし、1995 年の第一回大会以降、毎年開催されている国際学会である。本年度は「アジア太平洋地域における新しい観光パラダイムの発展」をテーマとして、76 本の口頭発表と 28 本のポスター発表が行われた。

本年度の開催地となったクアラルンプールは、マレーシアの首都であると同時に最大の都市である。市内にある高さ 452m のペトロナス・ツイン・タワー、高速道路や鉄道などの都市開発が次々に進められている一方、イギリス統治時代の歴史的建造物が今も残り、観光名所となっている。市販のガイドブックでは、新旧の文化が混在しているのがクアラルンプールの魅力の一つであると紹介されている。

今年の会場は日程によって分かれており、14 日と 16 日は Taylor's University Lakeside Campus、そして 15 日は Dorsett Grand Subang ホテルであった。Taylor's University は、マレーシアで最高ランクに属する大学であり、メインキャンパスである Lakeside Campus は数年前に完成したばかりとのことで、非常に綺麗かつ近代的であった。その名の通り、池のほとりにあり、周囲には自然も多く、とても落ち着いた環境にあった。同時に、校内にはスターバックスコーヒー等の有名な飲食

チェーン店も出店されており、学生にとっては便利なキャンパスであると感じた。

研究報告

私の APTA での発表タイトルは、“Effects of short-stay vacation on the mental health of Japanese employees”であった。この研究は、小口教授が研究代表者である文部科学省科学研究費基盤研究（B）「メンタルヘルスツーリズムの展開」の下に行われた。観光が従業員のストレスの低減にどのくらい効果があるのかを科学的に検証したものである。ストレス低減を目指した宿泊施設での一泊の観光旅行が、どの程度のものなのか、さらには、その効果はどのような人に特に効果的であるのかを検討した。

分析の結果、主観的判断による抑うつ感の低下、肯定的な感情や幸福感の向上が明らかになった。また、心理尺度のみならず、客観的な生理学的指標として、心拍から計測される脈波によって算出されるストレス値も低下することが明らかになった。さらには、事前のストレスの高い人がこうした観光旅行を経験すると、ストレスの低下がより顕著であることも確認された。

発表は、16 日の午前中に行われた。決められたセッション内で 3 人の発表者がそれぞれ 20 分ほどの時間を使って、口頭発表と質疑応答を行う形式であった。複数のセッションが同時に少教室で行われるため、それほど聴衆は多くないが、英語の口頭発表ということで、非常に緊張した。質疑応答の際に、質問者の方と上手くやり取りできなかった場面もあり、英語能力を更に高める必要



写真 1 今回頂いた賞状

があると痛感した。

また、大会 3 日目の夜に、Closing Ceremony と Farewell Dinner があり、その席で学会賞の発表が行われた。今回、私と小口教授の論文に対して The Best Paper Award の中でも最も評価の高い論文に対する送られる Dr. HaiSikSohn Award が授与された。このような賞を戴くのは初めてのことであったので、非常に嬉しく感じ、また今後の研究の励みとなった。

所 感

3 日間の学会での発表内容は、多岐に渡っていた。たとえば、観光産業における IT 化、ホテル従業員の職務満足感やグリーン・ツーリズムの動向などが取り上げられていた。スマートフォンのホテル予約アプリを取り上げた発表などもあり、そのような新たな科学技術を研究課題に取り上げる点は心理学の学会と同様であった。印象に残った研究は、別の日本から来た研究者が東日本大震災の被災地におけるダークツーリズムに関するものであった。ダークツーリズムとは、災害被災地、戦争跡地といった人類の死や悲しみを対象にした観光を指す。こうした他領域の研究を直に聞

くことができるのも、心理学以外の学会に参加する利点であると感じた。

最終日には、学会主催の Post-Conference Tour としてクアラルンプール市内の観光ツアーがあった。観光ツアーがプログラムに組み込まれているのも、観光学会ならではのと思う。チャーターバスで市内の名所を回るのであるが、写真 2 のペトロナス・ツイン・タワーは外から眺めるだけであり、上には登れなかったのが少し残念だった。このような観光ツアーがあると他の国から来た研究者の人と会話するチャンスになるため、有意義な時間であった。

今回の APTA は、2016 年の 6 月に中国の北京で開催される予定である。ぜひ、来年も参加し、自らの発表をより上手く伝えることができるよう今から準備しておきたい。

最後に今回、学会参加費、渡航費および現地滞在費への助成を頂いた立教大学現代心理学研究科の関係者各位、研究に協力して頂いた調査協力者の方々と共同研究者の皆様へ深く謝意を申し述べたい。



写真 2 市内のペトロナス・ツイン・タワー

ABAI 2015 参加報告

立教大学大学院現代心理学研究科 三島 大輝

2015 年の 5 月、Association for Behavior Analysis International が主催した The 41st Annual Convention of Association for Behavior Analysis (ABAI 2015) に参加してまいりました。これは行動分析学の国際的年次大会の 1 つです。開催地はアメリカ合衆国のテキサス州にある San Antonio でした。会場はリバーウォークに隣接する Henry B. Gonzales Convention Center でした。リバーウォークでは、川に沿って作られた道に飲食店やお土産の店が並

んでおり、見て回ることができます。開催日時は 5 月 22 日から 26 日まで、大会の初日は主にワークショップが行われ、2 日目からはシンポジウム、チュートリアル、口頭発表、招待講演、講義、ポスター発表が行われました。私の研究発表は 3 日目のポスター発表でした。

最初にポスター発表の会場に入ったとき、会場が日本では考えられないほど広く、そこにいた人はかなり少なく見えました。しかし、ポスター発



写真 1 San Antonio のリバーウォークの風景 1

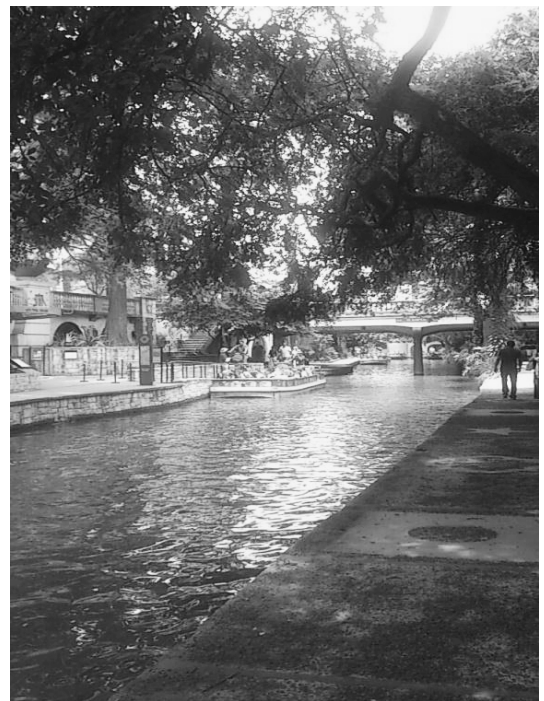


写真 2 San Antonio のリバーウォークの風景 2



写真3 会場の風景

表が始まると、会場は多くの人で埋め尽くされ、国際学会のにぎやかな雰囲気包まれていました。

私の研究発表の内容は、確率割引に及ぼす統制体重の効果についてでした。この研究はデンショバトを用いたものであるため、いくつかある研究領域の中から、基礎研究の領域で発表しました。

確率割引とは、確率によって報酬の価値が割引かれる現象のことです。例えば、100%の確率でもらえる10,000円の選択肢と50%の確率でもらえる10,000円の選択肢があり、どちらかを選択できるとします。このとき、人は100%でもらえる選択肢を選択するはずですが、報酬を獲得できる確率が低くなることによって、その報酬の価値が割引かれているといえます。また、確率割引の研究は、確率によって減少した価値が、一体どれくらいの価値なのかを調べます。例えば、ある人に100%の確率でもらえる5,000円の選択肢と50%の確率でもらえる10,000円の選択肢を呈示し、どちらかを選択させます。50%でもらえる選択肢を選んだ場合、その人にとって50%でもらえる10,000円は、100%でもらえる5,000円よりも価値が高いということになります。次に、同じ人に、100%でもらえる4,000円と50%でもらえる10,000円の選択肢を呈示すると、100%でもらえる4,000円を選択したとします。このとき、50%でもらえる10,000円の価値は、その人にとって、100%でもらえる5,000円から4,000円の間に相当する金額に相当すると考えら

れます。このように、100%でもらえる報酬量を操作して、確率によって割引かれた報酬の価値を調べます。この現象は、人だけでなく動物にも見られるものです。

動物を用いた確率割引の研究では、報酬として餌を用いて、確率的にもらえる餌が、どのくらいの確実にもらえる餌量に相当するかを調べます。また、行動分析学では、実験の手続き上、主に動物の体重統制を動因操作として行います。通常、動物は痩せているときに、餌を手に入れるために多くの反応をしますが、太っているときにはその反応が少なくなります。つまり、統制体重によって、動物の反応は変化します。そのため、私の研究では統制体重が確率割引にどのような効果を与えるかを調べました。実験によって調べた結果、ハトは体重が軽いとき、重いときに比べ、確実に餌をもらえる選択肢を選択しました。つまり、統制体重が厳しくなるにつれて、確率的な選択肢を避け、確実な選択肢を選択する傾向が示されました。

私のポスター発表には、さまざまな方が来て下さいました。まず、ABAI 2015のポスター発表では、Chairが決められており、発表者の研究を聞きに来ます。また、特に印象に残ったのは、私が専門とする行動分析学とは異なる領域の方が来て下さったことです。その方は、確率割引を研究している生物学領域の研究者でした。その方との会話の中で、同じ確率割引の研究でも、学問領域間で実験手続きの違いがあることを知りました。さまざまな国籍の研究者だけでなく、自分とは異なる学問領域の研究者とも話せる機会があり、とても勉強になりました。また、日本人の有名な先生方が発表を聞きに来て下さり、有意義な時間を過ごすことができました。

全体のポスター発表の内容を概観すると、基礎領域では刺激等価性や価値割引の研究が多く、応用領域では行動変容法を用いた教育や臨床の研究が多く発表されていました。ポスター発表のほかに、B. F. Skinnerの直接的師弟関係にあるA. Charles Cataniaの講義を聞きに行きました。そ

の講義は行動分析学と知覚や感覚心理学の関係についてで、とても興味深い内容でした。

ABAI 2015に参加するためには、多くの準備が必要でした。また、研究を英語で説明するための勉強も大変でした。しかし、ABAI 2015に参加することで、多種多様な人と交流することができ、

自身の視野を広げ、専門知識を深めることができました。国際学会は、研究の発展だけでなく、研究者として成長できる場であると実感しました。今回の経験を活かし、より研究に励みたいと思います。

SJDM The 2015 36th Annual Conference 参加報告

立教大学大学院現代心理学研究科 大川 達也

会議の概要

Society for Judgment and Decision Making (SJDM) は人間の判断や意思決定に関係する研究について扱う学会である。そして、この SJDM の年次大会である The 2015 36th Annual Conference が 2015 年 11 月 20 日から 23 日にかけて、アメリカ合衆国イリノイ州のシカゴにて開催された。会場はヒルトンホテルシカゴが利用され、多くの研究者が参加していた。

開催初日である 20 日にレセプションと講演、懇親会が催された。21 日から最終日である 23 日にかけて、ポスター発表や講演が行われた。

発表内容

コミュニケーションを行う際に SNS を利用するか対面で行うかの選択に影響を与える要因について検討するため、個人と関わる場合と、集団と関わる場合のコミュニケーションについて、質問紙調査を実施した。検討した要因は、「コミュニケーションの目的」、「話題の重要度」、「情報量」、「相手の好感度」、「相手の地位」、「相手の性別」、「相手との関係性の性質」の 7 つであった。

その結果、個人とコミュニケーションする場合には、「目的」と「重要度」によって SNS を利用するか対面するかを使い分けている可能性が示唆された。集団とコミュニケーションする場合には「重要度」の要因が SNS を利用するか対面するかの判断に影響を与えている可能性が示唆された。

聴講した発表や講演

22 日の 8 時 30 分からの講演で、アルコール依存症とセルフコントロールについての講演が行わ



写真 1 シカゴの街並み

れていた。講演内容は、インドの低所得者に対する 3 週間かけたフィールドワークに基づく研究を行っていた。アルコールを摂取していない状態の人に介入を行った結果、呼気に含まれるアルコールの量が 60% まで低下した。また、過半数の実験参加者はアルコールを飲まないで済むようになることを望んでいた。

感想

今回の学会参加を通して、とてもいい経験を積むことができたと思う。シカゴの整然とした街並みや日本より寒く、頻繁に雪が降る気候など、普段の日本での生活との違いに触れたり、外国人と直に交流したりする機会を得ることができた事に加え、様々なポスター発表を聞き、自分では考えも及ばなかった問題の着眼点や発想の仕方に触れることができたからである。今回の経験は、これからの私の研究や日常生活にいい影響を与えることだろう。

同時に、私が克服すべき問題についても知る

ことができた。例えば、英語に対する姿勢である。ポスター発表を行った時間が午前8時30分からということもあり、発表開始の頃は、会場内は発表者以外の人を見かけることは少なかった。初めての海外発表ということもあり、とても緊張していた私は、あまり人がいない時には落ち着いて発表をすることができていた。しかし、時間とともに多くの人が会場に足を運び、会場内の人数が増えてくると、不安を感じずにはいられなかった。それだけで、語彙力や聞き取りなど、日本で準備したことを十分に生かすことができなくなっ

たと思う。専門用語や会話表現など、勉強したつもりでいたものが思い出せなくなり、うまく言葉を続けたり、相手の意図を理解したり、自身の意図を伝えたりすることはできなくなってしまった。改めて、日本の中で勉強したことを、実際に海外で実践することの違いとその難しさを感じた。これまでの私は、英語に対して不安や難しさを感じ、実践するための英語に関わることに消極的な姿勢を取っていたことを実感したので、これからは、積極的に実践的な英語に触れ合う機会を増やそうと思った。

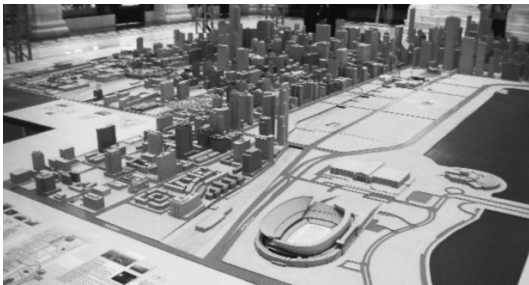


写真2 シカゴの町並みの模型

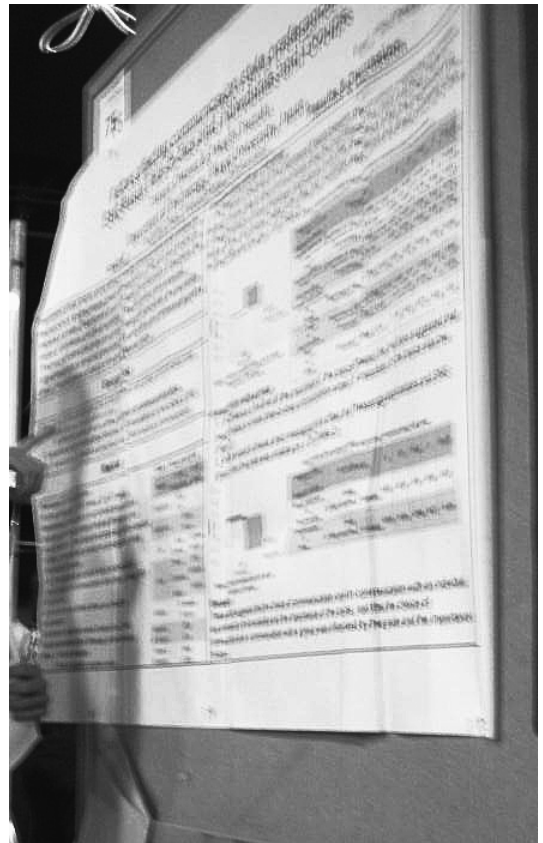


写真3 発表したポスター

ECP 2015参加報告

立教大学大学院現代心理学研究科 佐藤 秀香

ECP 2015 (the 14th European Congress of Psychology) は, EFPA (European Federation of Psychologists' Associations) の主催で, 2015 年 7 月 7 日から 10 日にかけてイタリア・ミラノの Milano-Bicocca 大学で開催された。パーソナル心理学, 交通心理学, スポーツ心理学, 医学や神経心理学等, 欧州および他大陸のあらゆるフィールドを対象とした会議であり, 初日にレセプション, 2 日目以降は基調講演やシンポジウム, 口頭発表, ポスター発表等が行われた。会議全体では, 比較的臨床心理学系統のセッションが多い印象であったが, 交通心理学や意思決定に関するセッションも複数あり, 自身の研究に関連した分野で新たな知見を得ることができた。

筆者は, 会期の最終日に “Factors affecting pedestrians' risk behavior” という題目でポスター発表を行った。街路歩行時のリスク行動として携帯電話使用とイヤホン使用を対象に質問紙調査を実施し, 共分散構造分析を用いて行動の要因モデルを検討した研究についての発表である。質問紙の作成および行動モデルの検討は, 主にリスク行動を対象としたモデルである Prototype / Willingness model (Gibbons, Gerrard, Blanton, & Russel, 1998 ; 以下 PWM) や PWM と行動に対するリスク認知の関係を明らかにした大友・広瀬 (2007) を参考に行った。分析の結果, 携帯電話使用およびイヤホン使用で同様のモデルが確認され, どちらも「リスク認知」から「態度 (行動に対する評価)」に有意な負の影響, 「態度」から「状況的意図 (ある状況で行動してしまう)」, 「状況的意図」か

ら「行動意図 (行動するつもり)」, 「行動意図」から「行動 (歩行中の携帯電話使用しないしイヤホン使用)」に有意な正の影響が見られた。ポスター発表の時間中, たくさんの方に立ち寄っていただき, 「歩行中のリスク行動を減らすためにどういった対策が考えられるか」, 「我が国ではまだ話題になっていないが, 今後重要な問題になりそうだ」といった質問や感想を頂戴した。リスク行動そのものや行動モデルに対する関心の高さとともに, 解決策となる行動変容方略を研究する必要性を強く感じた。また, 歩行中の携帯電話使用は日本では「歩きスマホ」, 英語圏では “Texting While Walking” として知られるが, 今後多くの国々でますます話題になっていくであろうと実感した。

筆者が聴講した研究発表のうち, “About Understanding Road Users” というセッションでは, Time, Space, Communication という要素の頭文字をとった TSC という考え方を提唱する発表に関心を持った。Time は時間のなさや時間ひっ迫性がスピードにつながり, Space はスペースがあることでスピードが出しやすくなり, Communication は ITS (高速道路交通システム) が人の情報のやり取りを減少させるということであった。要素にリアリティがないといった意見もあったが, 安全文化を可視化するという目的に惹かれた。“Empirical Field Work” というセッションでは, 若年層の自転車の危険運転と, リスク認知やローカス・オブ・コントロール, 動機づけ, 両親や友人の危険運転不承認等の要因との間に相関が見られたと

いう研究や、歩行者の信号無視に対し待ち時間の長さや自己および他者の命令的規範が影響したという研究が興味深かった。これらの研究で行動への影響が示唆された両親や友人の行動不承認や他者の命令的規範は、自身の行動に対する重要他者の反応予測である「主観的規範」と換言できるが、主観的規範は、筆者の歩行中の携帯電話使用、イヤホン使用に関する研究では分析結果により行動モデルに組み込まれなかった要因である。今後、主観的規範と行動の関係は慎重に扱ってきたい。

今回 ECP 2015 に参加したことで、世界の最新の研究に触れて見聞を広めることができたほか、自身の発表を通して研究の意義を再確認でき大きな励みとなった。ECP 2015 はスカラ座を擁する都市ミラノが会場ということもあり、会期初日に Milano-Bicocca 大学の講堂で行われたレセプションでは、オペラ歌手による歌が披露された。大学の広い敷地内には会議に関する案内板の類が一切

なく、炎天下、受付を求めさまようことになったが、素晴らしい歌声に汗も疲労も吹き飛んだ。ミラノならではの素敵なもてなしを受けた。

今回の ECP 2017 (the 15th European Congress of Psychology) は、2017 年 7 月 11 日から 14 日にかけてオランダ・アムステルダムで開催される予定である。

引用文献

- Gibbons, F. X., Gerrard, M., Blanton, H., & Russell, D. W. (1998). Reasoned action and social reaction: Willingness and intention as independent predictors of health risk. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1164–1180.
- 大友 章司・広瀬 幸雄 (2007). 自然災害のリスク関連行動における状況依存型決定と目標志向型決定の2重プロセス 社会心理学研究, 23, 140–151.



写真1 会場の Milano-Bicocca 大学

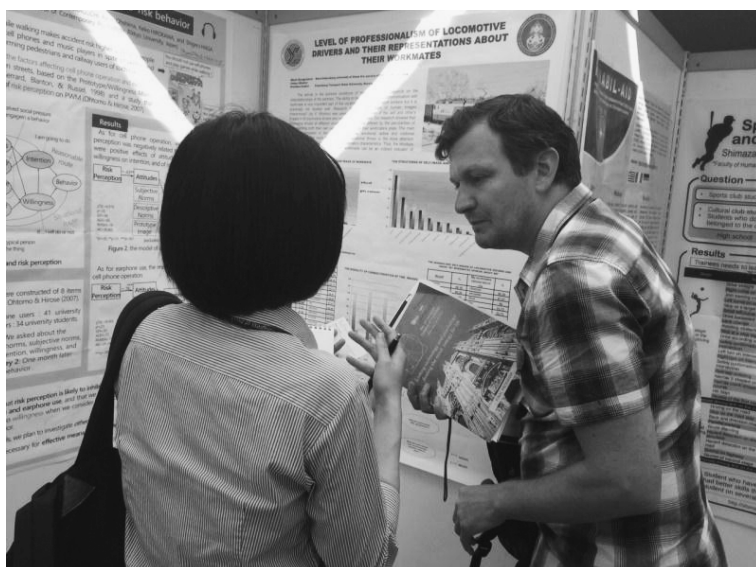


写真2 ポスター発表の様子

箕口雅博先生の定年ご退職にあたって

心理学科長 大石 幸二

2016年3月末日をもって、箕口雅博先生が定年ご退職となりました。箕口先生には、個人的にもたいへんお世話になってきており、先生がご退職を迎えられる年に私が学科長をさせていただいていることにも、そして、このようにお祝いの言葉を記させていただく機会を与えていただいたことにも、ただならぬ縁を感じています。

*

箕口先生は、1975年に慶應義塾大学文学部心理学科をご卒業の後、1977年に同・大学院社会学研究科教育心理学専攻を修了されました。そして、1978年4月より22年間の長きにわたり東京都精神医学総合研究所社会精神医学研究部門に心理主事として奉職されました。その後、1999年4月に立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科に移られ、2002年3月まで同・助教授、2006年3月まで同・教授、2006年4月より現代心理学部心理学科に移籍され、同・教授を歴任されました。立教大学では17年間お勤めになりました。

* *

学術活動の面では、派手さこそありませんでしたが、フロンティア精神を遺憾なく発揮され、研究者がなかなか手を出さない未開拓の領域で活躍を続けられました。コミュニティ心理学はもちろん、社会精神医学、集団精神療法、異文化間教育などの分野で残された功績はたいへん大きなものです。特に「日本コミュニティ心理学会」では、その前身である「コミュニティ心理学シンポジウム」（第1回開催は1975年）に発足時より深く関与され、長らくわが国のコミュニティ心理学やコミュニティ・アプローチの実践と研究を牽引し、

その社会的浸透に尽力されました。心理臨床実践に欠くことのできない臨床心理地域援助を開拓された先生の功績は、箕口先生の恩師であられる山本和郎先生（慶應義塾大学名誉教授）と共に末永く語り継がれ、その歴史にお名前が刻まれることと思います。

* * *

私は、冒頭「縁^{えにし}」という言葉を用いました。私がコミュニティ心理学と出会い、研究の舵を転換させた契機にも箕口先生が大きく関わっています。まだ筑波大学心身障害学系の助手をしていたころのこと、研究室の電話が鳴りました。1998年のことだったのではないかと思います。茨城県土浦児童相談所で障害児の親の自立支援講座があるので、その講師を引き受けてほしい、という依頼でした。私は、書籍をつうじて箕口先生のお名前は存じ上げておりましたが、直接ご本人とお話させていただくのは初めてでした。とても優しく、温かな口調でお話くださいました。その後、旧・安田生命社会事業団研究助成補助金を獲得した折に、その授賞式の席上、山本和郎先生にお目に掛かりました。箕口先生と見まがうような優しい眼差しと温かなお声でした。私が箕口先生と直にお目に掛かるのは、それから3年後に立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科の兼任講師をお引き受けしたときでした。直にお目に掛かり、私も箕口先生に師事した学生同様、先生のファンになり、今日に至っています。

* * * *

私は、箕口先生の導きがあって、現在まで日本コミュニティ心理学会の常任理事、編集委員会委

員長を務めています。そのような業務の中で、箕口先生が精力を傾けて開拓してこられた「中国帰国日本人孤児定着促進における精神衛生コンサルテーション」の取組や「レバノンのパレスチナ難民キャンプにおける心理サポート研修プロジェクト」の取組のようなマイノリティや社会的弱者と考えられている人たちのエンパワメントをはかる試みが、今後どのように継承されるのだろうか、と考えることがあります。R. B. Caplan 同様準専門家や非専門家との協働のもと、地域精神衛生の実践と研究を推進する人材の登場を願います。きっと立教大学コミュニティ福祉学部および現代

心理学部で研究指導を受けた学生はもとより、アドラー研究会などをつうじて薫陶を受けた多くの人たちの手により、これらの取組を含むコンサルテーション、エンパワメント、コラボレーションの実践と研究が推進されることでしょう。いつも箕口先生が仰っていた、「フットワークとネットワークと、少しのヘッドワーク」をもって私たちも歩んでいきたいと思います。

箕口先生、長きにわたりお疲れさまでした。そして、ますますのご活躍をお祈りしています。

2015 年度立教大学現代心理学部動物実験委員会報告

立教大学現代心理学部で行われる動物実験が適正な目的と方法によって遂行され、動物福祉の理念に反することがないようにするため、2007 年に動物実験委員会が設置され、以後、立教大学現代心理学部動物実験指針に従って、動物実験計画書ならびに同報告書について審査、点検が行われている。以下は 2015 年度委員会報告である。

第 1 回動物実験委員会 2015 年 9 月 7 日 稟議

実験申請 5 件が実験計画書にもとづき審議され、承認された。

なお 2015 年 4 月 1 日開始の実験申請 2 件は 2014 年度第 2 回動物実験委員会（2015 年 2 月 24 日）にて審議し、承認済みである。

以上

委員会構成メンバー

2015 年度 林，日高，●堀，塚本

（●印：委員長）

2015 年立教大学現代心理学部心理学研究倫理審査委員会審査報告

立教大学現代心理学部心理学研究倫理審査委員会

立教大学現代心理学部では、人間を対象とする心理学研究が倫理的配慮のもとに実施されるために、立教大学現代心理学部心理学研究倫理審査委員会規程に基づき審査を行った。2015 年 1 月～12 月の間に立教大学現代心理学部心理学研究倫理審査委員会において承認された研究（心理学専攻）は、下記の 21 件である。

申 請 者：心理学専攻博士課程後期課程 1 年次 川久保 惇

研究課題：自然環境の映像と音がストレス低減に及ぼす影響

申 請 者：心理学専攻博士課程前期課程 1 年次 川合 裕基

研究課題：囚人のジレンマ課題における認知的対比

申 請 者：心理学専攻博士課程前期課程 1 年次 笠原 亮多朗

研究課題：教育旅行経験が、ジェネリック・スキルと精神健康度に及ぼす効果

申 請 者：心理学専攻博士課程前期課程 2 年次 山口 紗希

研究課題：自動車運転時の音楽聴取が及ぼす車窓風景の印象

申 請 者：心理学専攻博士課程前期課程 2 年次 梶谷 幼菜

研究課題：ソーシャルストーリーおよびビデオ・セルフモデリングによる
自閉症スペクトラム障害児の社会適応の促進

申 請 者：心理学専攻博士課程後期課程 3 年次 千葉 元気

研究課題：知覚的意思決定課題における文脈効果の生起プロセスに関する脳波測定を用いた実験的検討

申 請 者：心理学専攻博士課程前期課程 2 年次 橋口 秀一

研究課題：顔認知における左注視バイアスと左知覚バイアスの関係性

申 請 者：心理学専攻博士課程後期課程 3 年次 廣川 佳子

研究課題：経営理念浸透尺度の信頼性と妥当性の検討

申 請 者：心理学専攻博士課程前期課程 2 年次 佐藤 秀香

研究課題：駅構内歩行中のスマートフォン使用に影響を及ぼす要因の検討

申 請 者：心理学専攻博士課程前期課程 2 年次 山口 紗希

研究課題：自動車運転時を想定した音楽聴取が及ぼす車窓風景の印象

申請者：心理学専攻博士課程後期課程3年次 廣川 佳子

研究課題：経営理念浸透尺度の信頼性と妥当性の検討（2）

申請者：心理学専攻博士課程前期課程3年次 赤木 真弓

研究課題：母親および母子関係についての評価が娘の人格形成におよぼす影響 研究1

申請者：心理学専攻博士課程後期課程2年次 川久保 惇

研究課題：ネイルケアが女性の心理に及ぼす影響の検討

申請者：心理学専攻博士課程前期課程2年次 笠原 亮多朗

研究課題：教育旅行経験がジェネリック・スキルと精神健康度に及ぼす効果

申請者：心理学専攻博士課程前期課程2年次 佐藤 秀香

研究課題：駅構内歩行中のスマートフォン使用を抑制する介入の検討

申請者：心理学専攻博士課程前期課程2年次 関根 由莉

研究課題：高度運転支援システムにおける信頼感と注意量に関する脳波測定を用いた実験的検討

申請者：心理学専攻博士課程後期課程3年次 廣川 佳子

研究課題：経営理念浸透尺度の信頼性と妥当性の検討（3）

申請者：心理学専攻博士課程後期課程3年次 廣川 佳子

研究課題：就職活動中の大学生にとっての経営理念の意味

申請者：心理学専攻博士課程後期課程3年次 廣川 佳子

研究課題：経営理念浸透尺度の信頼性と妥当性の検討（3）

申請者：心理学専攻博士課程前期課程1年次 劉 怡

研究課題：青年期における信頼感が恋愛欲求に及ぼす影響についての日中比較

申請者：心理学専攻博士課程前期課程1年次 呉 明月

研究課題：青年期における見捨てられ不安に関する日中比較研究

以上

委員会構成メンバー

林もも子（委員長）、日高聡太、熊上 崇、松永美希、芳賀 繁

